

2014.10.10

17 t h ASIAN GAMES(2014/仁川)視察について

レース委員会 津野 洋

9/26-28 の日程で、韓国・仁川で開催された、アジア大会セーリング競技会に参加して来ました。私は今回、レース委員会よりオブザーバーとして派遣され、目的としては国際大会等メジャーイベントでのレースマネジメントの現認を通じて 2020 東京オリンピックでの競技役員育成計画にフィードバックさせる事になります。

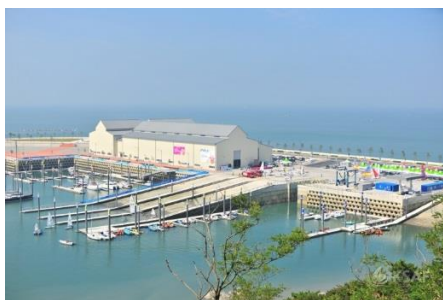
① はじめに

今大会はレース委員会から、岡田副委員長が ISAF ITO として、磯部さんがボランティアとして先に現地入りされていたので、会場までのアクセス、ID カードの発行手続き等、様々な面でサポート頂く事が出来、滞在中は快適に過ごす事が出来ました。この場をお借りしてお二方には感謝申し上げます。

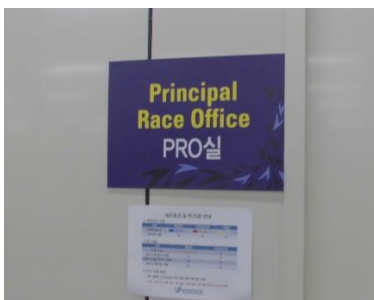
② 概要・施設

大会には 21 カ国 198 名が参加し、日本からは 12 種目中 6 種目 12 名の選手、その他メディア・ジュリー・レースミット・各部署に日本の方が数名加わっておりました。私は国際大会の経験が初めてでしたのでどんなものか想像もつきませんでしたが、(案外こじんまりとしている) 印象を受けました。

会場は仁川空港より車で 30 分程度のウォンサンマリーナで、今大会の為に新設されました。今後この地域に高級ホテル・カジノ等リゾート施設が建設されるそうです。



巨大なマリーナ建屋内には各ブースがパーティションで仕切られ、レースコミットに関係する部門では PRO ルーム 運営スタッフルームがありました。新設棟でもあり広々とした配置で、棟内では wifi が使用出来ました。



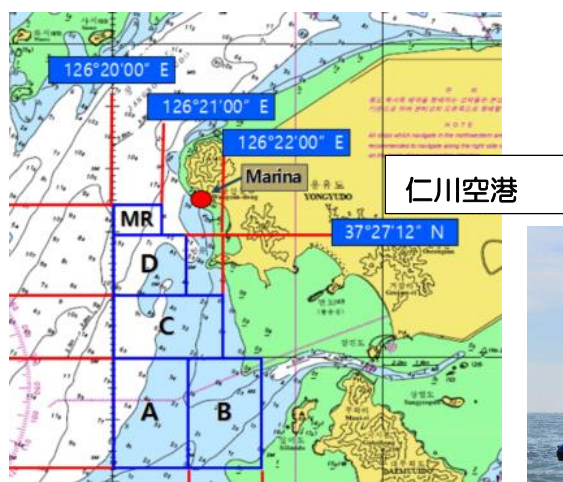


③ 海上運営

今回は海上での運営手伝いは出来なかったのですが、陸上から見える運営チームの動向や岡田副委員長の担当されたB海面（レーザー級、ラジアル級）の様子を聞き取る事等で情報を入手して이었습니다。

運営艇・運営チーム・人員

今大会はオリンピックでも実施される5海面での運営でした。陸上から一番近い海面はマッチレースで使用され、岸壁から見やすく陸上からの観戦が可能でした。下図のMRの海面ですが実際にはマリーナのすぐ南側でレースが実施されていました。メダルレースは今回は実施されませんでした。



各クラスの参加艇数が少ない事もあってか、全体に各海面の運営総数は想像よりは少ない人員でした。B海面では上マーク艇は2人、その他のポジションも同様な人数でした。又、本部船には7～8名乗船されていましたが、あまりレース運営に慣れていない方もいたようです。運営艇は特筆するような事はなく、日本と変わらない印象を受けました。オペレーションもそれ程変わった様な事はなかったと思いますが、ターゲットタイムについてPRO からコメントがあったようです。

私は初日の26日の夕方会場に入りましたが、B海面の運営のみが海上におり、他海面は終了しており解散してました。スタッフは先に解散するのは良しとしても、PRO も帰った？のは謎でした。

B海面スタッフは釜山のチームで編成されていました。地元の統括者は Jaebin Lee さんが担当しており、岡田副委員長と面識があるので、コミュニケーションが良くとれチームとしてまとまっている印象を受けました。後に述べますが、オリンピックでのISAF 派遣オフィサーと日本側のオフィサーの良い関係の手本を見たような気がします。

④ 陸上スタッフと多くのボランティア

陸上に長くいたので、レースコミッティ以外でも視察が出来ました。今大会、陸上では KSAF Inter Relations Manager の Victor YUN さんが、陸上での様々な事柄を決断されていた様に写りました。大会での彼は重要なポジションにいたと思われ、日本で言うと、総務なのか事務局なのか、とにかく彼に相談すれば解決出来る、そんなポジションの方が国際大会では必要なのかなと感じました。今回、JSAF からのレターで色々となりましたので、彼は磯部さんと私に対して、気を使って頂き、VIP ルームに招待され、VIP 艇での海上観戦まで手配して貰いました。VIP ルーム内では数名のボランティアがおり、日本語での会話、日本茶も提供して頂き、大変有難かったです。当日はマレーシアの偉い方々や香港のメディアの方等、結構頻繁に出入りがあり、JOC からも鈴木大地さんが訪問されたそうです。アジア大会でも多数のゲストがあるので、これがオリンピックとなるとどうなるのだろうか、JSAF は対応出来るのだろうかと思案な事を考えてしまいました。



レースコミッティの場合、ISAF 派遣のオフィサーの方の対応を考慮しなければいけないと感じました。空港から会場・ホテルまでのアテンドなどが挙げられるでしょうか。

会場では非常に多くのボランティアが参加されていました。大会役員のホテルにも対応するスタッフがあり、いわゆる（おもてなし）が日本の特許と思っているのは私含め多くの日本人だけなのかなと痛感させられました。

⑤ 考察

小委員会で纏められた「2020東京オリンピックに向けての海上運営メンバー育成計画」を今大会に照らし合わせてみますと

- Nino Shumuei 氏の助言 海上運営メンバーに要求されるスキル等

ISAF オフィサーと地元オフィサーがどのような関係でマネジメントをしているのかが今回一番興味がありました。実際本部船で観察はしていませんが、やはり前提として英語でのコミュニケーションが必須です。ただ流暢でなくても会話が成立すればなんとかなるかなあ（甘いかな？）と感じました。

- 海上運営チーム編成について

水域単位のチーム編成は、先に述べたB海面の釜山チームに該当するもので、チームワークの面のメリットの他、その海面のオフィサーの業務分散化にも繋がると考えられます。（全くの混在チームではオフィサー1人の責任・負担が大きくなりすぎると思われまゝす）

- 海外の経験豊富な IRO の指導者としての招聘

今回のように海外派遣も重要であるが、招聘する事でより多くのスタッフの教育に繋がるのでは？

⑥ その他

今回、B海面の運営スタッフと食事をするなど、貴重な交流が出来ました。今後お互いの交流を継続していければ、お隣の国で近いですし、より良い関係が構築出来るのではと思います。

オリンピックの運営に失敗は許されない

と育成計画書の冒頭には記載されております。その為に越えなければならないハードルは高いとは思いますが、この文言がこれから協力頂く若手にとっては、厳しいものに受け止められています。私の勝手な解釈で恐縮ですが、もう少し肩の力を抜くというか、レース運営側もやる事はやってレースを愉しむ、という発想で人材を確保する事も必要かと思います。

そして2020 東京では各海面で ↓の様な光景があちこちで実現出来れば最高なのではないかとそんな事を考えさせられたアジア大会視察でした。

最後に、今回この様な機会を提供頂き、多方面からバックアップを頂きましたすべての皆様に改めて感謝を申し上げたいと思います。有難うございました。



以上